

民俗芸能の保存と後継者育成問題 ——京都市内における『六斎念仏』の保存活動を事例に——

相原 進*

本研究は、京都市南区吉祥院において保存会活動が行なわれている「六斎念仏」という民俗芸能の保存会活動を事例として、都市と文化との関連を明らかにすることを目的としている。本研究においては、現在の保存会活動において最大の課題である後継者育成の中で発生している問題を、地域住民の生活と、その生活の場である都市との関連を踏まえながら分析する。その分析を行なうにあたり、本研究では3つの観点を設定する。第1には吉祥院地区の都市化、第2には保存会活動に参加する人々の意識、そして第3には、保存会参加者の各世代間における意識格差である。これら3つの観点から、後継者育成において発生している問題が、個別のものではなく関連性を持ったものであるということを示すことを明らかにしていく。

キーワード：民俗芸能，都市化，強制参加，精神的充足，実力主義，平等主義

目次

はじめに

- 1 六斎念仏の歴史と現在の状況
 - (1) 六斎念仏の歴史と概要
 - (2) 京都市内における六斎念仏の保存活動
 - 2 吉祥院地区と吉祥院六斎念仏について
 - (1) 調査時期と調査方法
 - (2) 調査対象地区の基礎データ
 - (3) 明治期から戦前までの吉祥院六斎念仏
 - (4) 戦後から高度経済成長期までの吉祥院六斎念仏
 - (5) 吉祥院六斎念仏保存会の活動と後継者育成
 - 3 保存会参加者の意識と後継者育成問題
 - (1) 地域住民が六斎念仏に参加するための要因
 - (2) 後継者育成と世代間の意識格差
 - (3) 後継者育成における問題の解決に向けて
- おわりに

はじめに

本研究は、芸能を題材として、都市と文化との関連を考察することを目的としている。芸能の中でも特に民俗芸能のような地域に根ざした芸能の場合、その保存活動に携わる地域住民の生活様式と民俗芸能の保存活動とが乖離することによって保存活動への参加者の減少や後継者不足が発生し、民俗芸能が衰退・廃絶してしまうことも珍しい話ではない。そこで民俗芸能をどのようにして保存するのかという課題が発生するのであるが、民俗芸能の衰退と地域住民の生活との乖離という問題とは表裏一体の関係にあるため、本当に地域住民に負担を課してまで民俗芸能を保存しなければならないのかという根本的な問いかけが生じることもあれば、映像

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

による記録などの方法で、地域住民に負担をかけないようにする方向性を探るべきなのではないかという提起がなされることもある（大石、1998）。このような状況のもとでは、ただ個別の民俗芸能の保存という点のみに着目するではなく、民俗芸能を中心とした生活と文化をめぐる問題として、これを把握する視点と方法が必要であると考えられる。

そこで本研究においては、事例研究をもとに地域住民の生活や彼らの生活の場である地域と民俗芸能の保存活動との関連を分析することによって、民俗芸能の保存のためにはどのような要因が重要な役割を果たしているのか、そしてその中でどのような問題が発生しているのかということを明らかにしたい。

事例研究の対象としては、現在、京都市南区吉祥院において保存会活動が続けられている「六斎念仏」という民俗芸能を取り上げる。この「六斎念仏」は江戸時代以降、現在の京都市およびその周辺地域において盛んに行なわれている民俗芸能のひとつである（芸能史研究会編、1978）。調査対象地の吉祥院地区において六斎念仏が行なわれ始めたのは明治期以降であるが、戦後京都市で開催された「六斎念仏コンクール」では吉祥院地区が3年連続の優勝を果たし、その後もテレビ出演や地方公演などの活動が続けられている。そして1995年には後継者の育成を目的として「子ども六斎会」が結成され、後継者育成にも積極的に取り組んでいる地域であると言える。このような事実から、現在における民俗芸能の保存のあり方と将来的な展望を知るための対象として、吉祥院地区の六斎念仏を取り上げることが有意義であると考えられる。

現在の吉祥院地区の保存会活動において最大

の課題とされていることは後継者育成である。吉祥院以外の地区では六斎念仏を行なう組が廃絶してしまうことも多く、活動を継続している場合も、後継者不足のために今後の存亡が危ぶまれている組が存在する。

そこで本研究においては、地域住民と彼らの生活の場としての地域との関連を踏まえつつ、3つの観点から、吉祥院地区の保存会活動の変遷と後継者育成問題に関する分析を行なうことにしたい。第1の観点としては、吉祥院地区の都市化に伴う地域住民の経済活動における変化に着目する¹⁾。昭和初期までの吉祥院地区は農村地帯であったが、1960年代以降、この地区は急速に都市化が進行している。そのような変化に伴ない、住民の経済活動および保存会活動も必然的に変化することになった。昭和初期までは住民のほとんどが農業に従事していたため、水系などの地域共有財産の利用といった恩恵を受けるためには、地域活動として重要な位置を占めていた六斎念仏への参加は不可欠であった。しかし地域の都市化に伴って地域住民の就業形態が第2次・第3次産業へと移行したため、六斎念仏に参加することに対する強制力が著しく希薄化していったのである。

そこで第2の観点として、保存会活動に参加する人々の意識における変化に着目する。六斎念仏への参加が強制ではなくなったため、経済活動上における強制力以外の要因がなければ保存会活動が継続されることはない。調査を通じて明らかになったことは、参加者が地域の文化やアイデンティティを守るといった目的他にも、参加者自身が精神的充足を得るために保存会へ参加しているということである。そのような傾向は後継者世代である小学生において顕著に見られ、精神的充足こそが、彼らが保存会活動に参加するための最大の

要因と考えられるのである。

そして第3の観点として、後継者育成に関わる世代ごとの意識の格差に着目する。吉祥院地区の場合は「子ども六斎会」を結成することによって、未成年者が保存会に参加できるようになっている。その活動は保護者や小学校教員らの協力のもとに進められているが、今後も彼らが、その運営のための労力を負担しつづけることが可能なのかという問題が生じている。また、強制参加であった当時から保存会に参加している高齢者世代の人々、活動を補助する立場にある小学校教員、精神的充足を求める後継者世代の意識は必ずしも一致しているとは言えない。そこでこれらの問題と都市化・工業化との関連に注目した分析を行なうとともに、将来的な解決の方向についても考察を行なう。

1 六斎念仏の歴史と現在の状況

（1）六斎念仏の歴史と概要

六斎念仏の歴史や芸能に関しては、すでに「芸能史研究会」によって詳細な調査報告書が作成されている（芸能史研究会、1978）。そこで本研究においては、六斎念仏の歴史と芸能について、簡単に紹介することにしたい。

六斎念仏は、10世紀に空也上人によって始められた踊躍念仏を起源としている。しかし空也上人の踊躍念仏が、どのような歴史を経て現在のような六斎念仏になっていったのかを正確に裏付ける資料はない。さまざまな資料から推察されることは、江戸時代中期には現在も「六斎念仏」と呼ばれているような芸能が成立していたということである。

江戸時代中期以降の六斎念仏は、その芸能と演目によって念仏中心の六斎念仏（念仏六斎）

と、芸能中心の六斎念仏（芸能六斎）の2つに大別される。念仏六斎は念仏を伴う太鼓曲が中心であるが、もう一方の芸能六斎の場合は、各演目のうちの最初と最後の演目では念仏を唱えるが、他の演目は太鼓の曲打ちの「四ツ太鼓」「六ツ太鼓」や獅子舞、歌舞伎、狂言、祇園ばやしなどであり、その芸能はバラエティーショーのような様相を呈している。

『拾遺都名所図会』には、江戸時代の六斎念仏の様子が以下のように描かれている。

六斎念仏は毎歳七月十五日に在郷よりおのおの組を立て、都の町々に出、盂蘭盆会魂祭の馳走に家々の所望により行ひける。近年はおどけ狂言をまじえて衆人の目を悦ばしむるも、三仏祭の因なる便りならんか。

この記述に見られるように、江戸中期以降は「在郷よりおのおの組を立て」ることによって作られた、講のような集団によって六斎念仏が行なわれていた。現在では祇園祭などが京都の祭を代表していると言われるが、これらの祭はどちらかといえば町衆の祭であって、当時の庶民や農民にとっては六斎念仏の方が親しみやすいものであった。

（2）京都市内における六斎念仏の保存活動

明治期以降、京都における六斎念仏は芸能六斎が主流になり、念仏六斎は衰退していくことになる。戦時中、六斎念仏は一時的に中断することになったが、戦後には各地区で再開され、1953年から3年間、京都市東山区の円山公園公会堂において「六斎念仏コンクール」が開催されるほどの活気を呈している。また、同年には吉祥院、桂、久世の3つの六斎念仏が国の無

形文化財に指定されている²⁾。

1955年前後までは六斎念仏が活発に行なわれていたが、都市化や高度経済成長の中で就業形態や娯楽が多様化し、それに伴って六斎念仏は急速に衰退していくことになった。しかしそのような状況の中で、伝統芸能として高い水準を持ち、保護・育成するに値するものとして評価された六斎念仏は、1983年に国から重要無形文化財の指定を受けることになる。ただしこれは特定地域の六斎念仏を対象とした指定ではなく、京都市内の保存会が集まって作られた「京都六斎念仏保存団体連合会」を指定対象としている。

2001年時点では、京都市内の各地区の住民によって作られた11の保存会に六波羅蜜寺を加えた計12団体が「京都六斎念仏保存団体連合会」として六斎念仏の上演を行なっている³⁾。しかし現在残るもののほとんどは芸能六斎であり、念仏六斎を行なっている保存会は上鳥羽と西方寺の2つを残すのみである⁴⁾。

2 吉祥院地区と吉祥院六斎念仏について

（1）調査時期と調査方法

本研究は、2000年8月から2001年12月までに、吉祥院六斎念仏保存会において行なった調査にもとづいている。調査方法は、関係者へ日時・場所および質問事項をあらかじめ決めた上で、会の運営や現状についての質問を行なったフォーマル・インタビューと、練習日などに保存会関係者に対し、その都度気づいたことなどを質問したり、会員や保存会に参加している子どもの保護者らとの会話の中で研究に関して重要であると思われることを記録することによって行なったインフォーマル・インタビューが中

心となっている。フォーマル・インタビューに関しては、保存会でも中心的な役割を担っている町内会の自治会長、保存会の実行責任者としての委員長、そして会計の三役のほかに、保存会に参加する子どもの指導の補佐をしている小学校の教員に対しても行なっている。子どもの会員に対して質問を行なう場合、まずは保存会の三役と小学校の教員の許可を得た上で、保存会に参加している子ども全員に対し一人あたり約10分程度のインタビューを行なっている。ただし子どもの中には未就学児童もいるため、実質的に形式的なインタビューは不可能であるため、おおよその質問事項を踏まえた上で一緒に遊んだり雑談をしている中で聞き取りを行なう場合もあった。

なお、本研究においてフォーマル・インタビューから得られた資料を引用する場合、特にその旨を「注」に明記している。

（2）調査対象地区の基礎データ

吉祥院地区における六斎念仏の歴史と現状を述べる前に、まずは吉祥院地区そのものについて紹介することにしたい。現在の吉祥院地区は京都市南区に属しており、『京都市統計書』によると、2001年時点の南区の全人口は98111人となっている。南区の総面積は約15.67平方キロメートルであり、このうち住宅地が32.61%、工業地が16.15%、商業地が0.77%となっている。吉祥院地区は南区のほぼ中央、桂川の東に隣接する地区である。南区のうち、江戸時代に開拓された旧吉祥院村に相当する地区が吉祥院と名付けられており、他には地名に吉祥院を冠した西ノ庄、中河原、新田、這登、石原、嶋がある。本研究で取り上げた吉祥院六斎念仏保存会には、主に吉祥院菅原町、吉祥院砂ノ町、吉

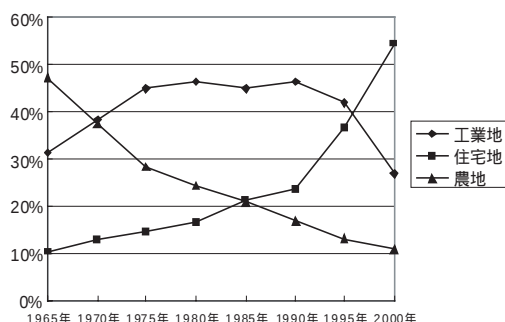


図1 吉祥院地区における土地使用割合の変化

吉祥院東砂ノ町，吉祥院這登東町，吉祥院西ノ内に在住する住民が参加しているが，これらの地区には計752世帯，869人が在住している。現在の吉祥院に相当する地区は，もともとは京都市に編入されるまでは紀伊郡に属する村であり，1931年4月に京都市下京区に編入されることになった。1955年には下京区から南区が独立し，さらに1959年には南区に久世村が編入されたことによって，現在のような行政区分となった。

南区は高度経済成長期以降，急速な都市化によってそのあり方を大きく変容させている。『京都市の地名』によると，第二次世界大戦後までの吉祥院地区周辺は農業を中心とした地域であったが，昭和30年（1955年）以降，工場化と人口増による住宅地化が進んだと記されている（平凡社編，1979）。吉祥院地区の住民の話では，戦前は8割ほどが農業従事者であったという。参考までに1965年と2000年の土地区分を比較すると，南区全体に占める農地の割合は47.28％から10.85％に減少し，住宅地は10.26％から54.50％へ増加している。工業地の割合は31.36％から26.93％に減少しているが，これは1980年に46.45％となったのをピークに，減少傾向に転じた結果である（図1）。

（3）明治期から戦前までの吉祥院六斎念仏

この節からは，明治期以降の吉祥院六斎念仏が，地域に生活する人々や地域の都市化との関連の中でどのように変化していったのかということ述べることにしたい。

六斎念仏の歴史の変遷について述べる前に，まずは参考までに吉祥院六斎念仏の芸能について触れておきたい。吉祥院六斎念仏では太鼓曲や獅子舞といった芸能六斎の代表的な演目に加え，狂言をもとにした『土蜘蛛』，歌舞伎からの採物である『岩見重太郎』などの演目を持っている。芸能の特徴としては，明治期には太鼓の調子が緩やかであったものが，活動を進めるうちに「早く太鼓を打つ」ことが重視されるようになったことが挙げられる。六斎念仏の上演では，これらの演目を「発願」から「回向唄」までを通して演じることになる。

吉祥院六斎念仏は明治初期に始められた。明治期の吉祥院地区（旧吉祥院村）内には，吉祥院天満宮を中心に北条，南条（後に菅原町と改名），東条，西条，新田，石原，嶋，中河原，上久世といった字があった。これらの字のそれぞれに1つの六斎組があったが，菅原町にのみ六斎組が無かったために，明治期になると菅原町にも六斎念仏の組を作るための活動が始まる。このような経緯のもとで，菅原町の六斎組は，地域団体のひとつである青年会活動の一環として成立することになった。現在の保存会には明治15年（1882年）の年号が入った鉦が所蔵されていることから，この時期に菅原町の六斎組が結成されていたことが推察されるが，正確な記録は残されていない。

菅原町に在住する男性は15歳になると必ず青年会に加入することによって義務付けられており，加入しなかった場合は一人前とみなされな

かったり、地域集団からの排除に遭うことになった（俗に言う村八分）。そのため、青年会に加入しなかった場合は地域の共有財産である用水路を使えなくなるなどの不都合も発生した。当時、この地区の在住者のほとんどは農業従事者であったため、このような制裁のもとでは青年会へ加入しないことはありえなかったのである。青年会へ加入した若者は、その活動の中でも重要な位置を占めていた六斎念仏にも関わることになる。加入して2、3年間は「チャワン」または「チャワン会」と呼ばれる役職に属することになる⁵⁾。「チャワン会」の仕事内容は雑用がほとんどであり、主な仕事は、六斎念仏を上演する際に太鼓や衣装などが積みこまれたリヤカーを上演場所まで引いて運ぶことであった。

「チャワン会」の若者に対する演奏や演技の指導はほとんど行なわれず、古参の会員が練習しているのを見様見真似で覚える以外には、彼らが技術を習得する機会はほとんど無かった。しかも「チャワン会」の若者は、実際に使用する太鼓などの楽器や道具に触れることも許されなかったため、太鼓の長さに切った物干し竿を棒で叩くことによって太鼓の練習を行なったという。笛の練習も実際に楽器を扱えるわけではなく、せいぜい古参の者が口唱歌で伝えるくらいで、たいていは練習しているのを傍で聞いて覚えるのが常であった。まれに行なわれる先輩からの指導も厳しく、実際に指導される場合は少しでも演奏を失敗すると、すぐに太鼓のバチで手を叩かれたという。

このような中で2、3年を過ごしたあとに、それぞれの得手、不得手に応じて太鼓や笛などの楽器や『岩見重太郎』などの「芸もの」の担当という具合に、それぞれの役割分担が決められる。しかし「チャワン会」を経ても一向に技

術が向上しない者は「ゴロマ」という役職に回される。これは「チャワン会」と同様の雑用係のことで、「ゴロマ」になってしまうとそれ以後は雑用以外の役を与えられることは無くなるため、「ゴロマ」になった者は自然退会していく場合がほとんどであったという。そして25歳になった者は「後見」と呼ばれる役職となり、一線から退いて会員の指導や世話にあたることになる。

当時の青年会が行っていた六斎念仏関連の活動は、京都市内およびその周辺地域の地蔵盆や寺社、さらに祇園の大柵への勧進が中心であり、それらを通じて活動のための運営資金も得ていた。青年会の活動の中でもっとも重要な意味を持っていたのが、毎年8月25日に吉祥院天満宮にて開催される夏季大祭での奉納であった。この奉納の舞台には、青年会の中でも技術的に秀でた者だけが上がることを許されたのである。

明治期から戦前までの青年会の活動については、青年会の活動と農業とが密接に結びついているため、青年会への参加は実質的に強制であったことがその特徴として挙げられる。また、青年会における徹底した実力主義という方針も、強制参加ゆえに可能であったと言えるであろう。

（４）戦後から高度経済成長期までの吉祥院六斎念仏

戦時中は徴兵による人数不足のために青年会活動は一時的に中断されたが、戦後になると再び活況を取り戻した。戦後は青年会が消滅し、1950年に六斎念仏を行なうための団体として「共親会」という団体を発足させることになる。共親会は六斎念仏のみを行なうという点で青年会とは趣を異にするが、会の構成員や基本的な

方針は青年会当時のものをそのまま引き継いでいる。青年会と決定的に異なるのは、共親会への参加が強制的ではないという点であるが、実質的には若者のほぼ全員が参加することになったという。

共親会は、1953年から55年にかけて京都市の円山公園公会堂において開催された「六斎念仏コンクール」では3年連続の優勝を果たしている⁶⁾。この当時の共親会は、戦前と同様に寺社や地蔵盆、祇園の大棚への勧進も行なっていたが、コンクールでの連続優勝もあって評判が高まり、地方公演やテレビ出演も行なうようになった。

このコンクールからの数年間が共親会の最盛期であった。公演回数の多さもさることながら、会への参加者の多さこそがこの時期の特徴であった。この時期には約50人が共親会に属しており、同時に2ヶ所で勧進を行なえるだけの人数的余裕があったという。そしてこれらの活動の中でも、最高の舞台は吉祥院天満宮大祭での奉納であった。

1960年以降、吉祥院地区は区画整理や大工場や大店舗の進出、住宅地化の進展などによって急速に都市化する。都市化は地域住民たちの就業形態に大きな変化をもたらし、それに伴って六斎念仏に関わる活動方針も多大な影響を蒙ることになった。都市化に伴なって地域住民が第1次産業以外に従事するようになると、例えば「田に水を入れられない」といったような制裁はほとんど意味をなさなくなってしまう。また、数多くの勧進やテレビ出演・地方公演などを行なう場合はもちろんのこと、徹底した実力主義のもとで六斎念仏の技術を習得しようとなると、ある程度の自由時間が確保できる自営業や農業でなければ六斎念仏に携わることができ

ない。さらに京都市全体の都市化によって自由時間の過ごし方が多様化したということも、六斎念仏から人々が離れるきっかけとなった。

このような状況の中で、新規加入者がいないままであった共親会の人手不足と高年齢化は慢性的となり、本来は「後見」として一線を退いた人々も上演に携わるようになった。1980年には会員の数が大幅に減少したため、吉祥院地区内の20代から30代前半の若者に呼びかけて共親会に参加させたこともあった。これによって約10人の若者が新規加入したものの、従来どおりの厳しい指導に耐えかねて、加入後1ヶ月までには2人を残し、残りは退会することになってしまった。

1983年、京都の六斎念仏は「京都六斎念仏保存会連合会」として国から重要無形文化財の指定を受け、共親会も「吉祥院六斎念仏保存会」として活動を続けることになる。しかし、その実態においては衰退傾向にあった。かつては吉祥院地区に8つあった六斎組も菅原町の共親会を残すのみとなり、しかも菅原町の組も人手は減り、会員のほとんどが60歳以上の高年齢者となるような状況であった。そしてそのような傾向は1990年代前半まで続いたのである。

（5）吉祥院六斎念仏保存会の活動と後継者育成

現在の吉祥院六斎念仏保存会には成人男性が25名所属しているが、年齢にもとづき、その構成員を大きく3つに分けることができる。60歳以上の世代は戦前・戦後の強制参加であった時期に六斎組に加入した人々であり、それに続く40歳前後の世代は1980年に若者が保存会に加入し現在も在籍している2名であり、大学生から小学生までの世代は、後に述べる「子ども六斎会」の結成に関わる世代である。

保存会の重要な役職は町内会の自治会長、保存会の実行責任者としての委員長、そして会計の3役であり、他に庶務、代表幹事2名、会計監査2名を置いており、これらの役職のほとんどは60歳以上の年長者が占めている。保存会の主な活動は、毎年4月25日と8月25日に開催される吉祥院天満宮大祭での奉納のほか、吉祥院地区内外のイベントや地蔵盆での実演も、依頼に応じて行なわれる。練習は毎月第2・第4金曜の2回、「吉祥院学習センター」という地区内の福祉施設にて行なわれる「子ども六斎会」での子どもたちへの指導が中心となる。吉祥院天満宮への奉納の前には、成人以上の保存会員が集まって何日か集中的に練習を行なうが、それ以外には各保存会員の仕事の都合などもあり、成人の会員が集まって練習することはできないとのことである。

会の運営費用は吉祥院天満宮への奉納によって得られる謝礼の他、国から重要無形文化財に指定されたことによって得られる援助金によって賄われている。なお、昭和30年代までに行っていたような地方興行や大棚への勧進は、現在では行われていない。

吉祥院六斎念仏保存会の活動の中でも特徴的なのが、「子ども六斎会」を設けて後継者の育成にあたっていることである。「子ども六斎会」が作られるきっかけは、1992年に行なわれた、小学生を対象とした地域学習に始まる。この地域学習は「すそ野学習」とよばれ、その実施と指導においては、小学校教員が中心的な役割を果たした。ただし1992年の時点では、フィールドワークを行なう中で六斎念仏の歴史などを調べて報告を行なうのみで、実演を始めたのは翌年の「すそ野学習」2期生からである。実演することに対し、保存会会員からは「本当にで

きるのか」「一生懸命やらせたら、教育熱心な親御さんに文句を言われたりしないか」などの批判があったという。また、その練習では実際に使われている道具の使用は許されず、子どもたちが作った道具を使用することになった。しかも保存会会員からの指導は受けられず、ビデオを見ながら見様見真似で足の運び方や獅子の頭の振り方を覚え、囃子は保存会の演奏を録音したテープを用いることになった。

小学生たちの練習は進み、京都市内で「すそ野学習」を実施している地区同士が集まって開催される「すそ野学習全市交流会」において、体験発表というかたちで六斎念仏を実演するまでに至る。そして1993年に吉祥院地区の敬老福祉センターで開催された「敬老の集い」において、地元での初演も達成されることとなった。その後も吉祥院学習センター内に設けられた児童館の竣工式においても小学生たちにとって実演が行なわれた他、1995年の「すそ野学習全市交流会」では、これまでの獅子舞の他に『岩見重太郎』を演じるまでに至った。着実な実績を積み重ねる「すそ野学習」での六斎念仏に対し、当初は指導を一切行なわなかった保存会側も態度を軟化させ、保存会側と「すそ野学習」側との歩み寄りもあって、保存会会員が小学生を指導することになった。

保存会の会員の協力が始まったことにより、これまでのビデオを用いた見様見真似の振り付けや手作りの道具を用いた練習から、実際に保存会で使用されている道具を使い、保存会員が小学生たちに伝承するという練習形態になった。このような経緯から1995年3月には「子ども六斎会」が結成され、吉祥院天満宮大祭における奉納に小学生が正式に参加できるようになった。なお、小学生の参加者の中には当然の

ことながら女性も含まれている。それまでは男性のみが練習や上演への参加を許されていたが、慣習よりも保存会の発展を優先させたいという保存会会長の意向のもと、女性の参加も認めることになった。

現在の「子ども六斎会」ではさらに活動が活発化し、保護者たちによって結成された「地域保護者懇話会」が会の活動を補助する取り組みも行なわれている。また、吉祥院小学校の教員も「子ども六斎会」の指導を補助するために、毎回約2名が練習に参加している。これは、指導にあたる保存会員は60歳以上である場合が多く、低学年の基本的な指導や習わせ方に関しては小学校職員のほうが慣れているということもあって、現在の「子ども六斎会」では小学校職員がサポート役として協力することになった。

3 保存会参加者の意識と後継者育成問題

（1）地域住民が六斎念仏に参加するための要因

吉祥院六斎念仏保存会の場合、現在は「子ども六斎会」の発足によってふたたび活動が盛んになりつつある。しかし京都市内全体に目を向けると、戦後以降、六斎念仏の衰退化は続いていると言えよう。また、本研究の調査対象である吉祥院地区を見ても、最盛期には地区内に8つの六斎組があったものの、現在では1つを残すのみとなっていることから衰退傾向は窺い知れるであろう。そこで本章においては、地域住民がどのような要因のもとで保存会に参加しているのかということを明らかにすることによって、六斎念仏の衰退と現状、そして将来的な発展について考察することにした。

先に述べたとおり、明治期から戦前における

吉祥院六斎念仏の場合、農業との関係上、六斎念仏への参加は強制的なものであった。しかし、六斎念仏には強制参加という側面の他にも、参加者自身が精神的な充足を得るという側面もあったと言えよう。それは、京都の郷土史家である田中緑紅による以下の記述からも窺い知ることができる。

この六斎念仏は、近年余りにも〔六斎念仏を鑑賞する以外の〕娯楽が多くなりましたので顧みられなくなりましたが、明治大正の頃までは大衆に喜ばれ、演出者も楽しみ、謝礼のことなどは問題になりませんでした。一応昭和二十年で我国の国情も一変して、この六斎念仏も宗教行事から、本質の念仏が形骸だけとなり六斎念仏踊と変わってしまいました。（田中、1959: 5）

また、これは調査対象の吉祥院のみに限定されることかもしれないが、もともと吉祥院菅原町の組が結成された理由は、吉祥院地区内の他の字には六斎念仏があるのに自分たちの字には六斎念仏がないということと、自分たちも吉祥院天満宮に六斎念仏を奉納したいという意識によるものである。

これらの事実から、吉祥院地区の住民が六斎念仏に参加する要因として、2つのことが考えられる。すなわち、1つは農業との関連による強制参加という要因であり、もう1つは参加者自身が六斎念仏を演じることを通じて得られる精神的充足であると言えよう。

戦後から現在までの保存会活動に関わる人々においては、戦前までの強制参加という側面が消滅した結果、参加者自身の精神的充足という側面が参加のための主要な要因となっていった

と考えられる。実際、そのような傾向は後継者世代である小学生の世代において、いっそう顕著な形で現れてくる。子どもたちに対し保存会活動に参加する理由を聞くと、小学校低学年・高学年ともに「楽しいから」「皆の前で太鼓を叩けて嬉しいから」という意見がもっとも多く聞かれ、他には「小学校の先生が誉めてくれるから」「六斎念仏の練習に来たら帰りにジュースをもらえるから」といった意見を聞くことができた。このことから、人前で上演することによって得られる精神的充足こそが、子どもたちが保存会に参加するための主要な要因であると考えられる。これを裏付ける意見として、「子ども六斎会」の結成以来その指導に携わってきた会員からは以下のような意見を聞くことができた。

最初の頃はきついことを言ったので泣いていた。教え方を変えないことには到底続かないということになった。今では「天満宮の舞台へ上がってパーッと拍手してもらってうれしい」という感じでやっている。まずは拍手をもらうことを覚えてもらって、その後も丁寧に扱いつつもややきびしめに指導している⁷⁾。

また、吉祥院地区以外で後継者育成に成功を収めていると思われる保存会では京都市下京区の中堂寺地区が挙げられる⁸⁾。中堂寺六斎念仏保存会の会長は「六斎念仏保存団体連合会」の会長も務めているが、その人物からも同様の話を聞くことができた。

これは私がよく言うことなんです、私たちが子どもの時は、練習に来たらご褒美にうどんやおにぎりを食べさせてもらって、それはうれしかった。でも今の子どもは、そんな

ことでは喜ばないんです。舞台上上がって、拍手をもらうことがうれしいんです。だから、うちの保存会ではどんな小さい子どもでも、まずは舞台上上げて拍手をもらう。それで拍手されることを覚えてもらうんです。これからの保存会は、こういうやり方が大事だと思います⁹⁾。

これらに見られるように、現在の六斎念仏の活動に携わる際の最大の要因は、精神的充足であることに注目すべきであろう。

（２）後継者育成と世代間の意識格差

吉祥院地区では「子ども六斎会」を作ることによって後継者育成が行なわれているが、ここでは、保存会内での世代間における意識格差に注目し、その中で発生している問題を取り上げることにはしたい。

60代以上の保存会員にとっては、若年期に徹底的に何年も厳しく指導される中で六斎念仏の技術を教えられるのは当然のことであった。このような指導法が通じたのも、参加が強制であったことや地域社会で認められるためには六斎念仏の活動から離脱することは許されなかったという理由からである。しかし現在は強制参加ではなく、しかも面白くないことがあればすぐに離脱者が生じてしまうのであるから、子どもたちに技術を伝承する際は指導法や話し掛け方など、なるべく優しくしなければならぬということになる。指導法についての問題は特に問題は発生していないようであるが、これについても小学校職員からは「会長さんたちもよく我慢してくれていると思う」という話を聞くことができた。

後継者世代である小学生の子どもたちは、自己実現や精神的な充足のために保存会活動に参

加している傾向が強いのであるが、たとえば厳しく叱られることや、保存会活動そのものに飽きてしまうこと、中学になってクラブ活動などのほうに関心が移ってしまうことなど、保存会によって自己の充足に反する事実と直面すると、子どもはすぐに練習に来なくなってしまうという問題も発生している。現在の保存会活動は参加強制でないため、これらのような理由での離脱者が生じるのは当然であると言えるであろう。

しかし吉祥院天満宮への奉納などの実演のことになると事情が違ってくる。60代以上の保存会員にしてみれば、ふだんから徹底的に教授され、さらに実力のある者のみが吉祥院天満宮に奉納することが許されるということは当然のことだったのである。「子ども六斎会」に属する子どもが演じるのは「四ツ太鼓」や「六ツ太鼓」のような太鼓曲であるが、ここでの出演順序は年齢順を基本としつつも、同年齢者の場合は実力順となるのである。保存会員はこの事に対し何の疑問も抱いていないが、ある小学校職員からは何らかの配慮をしてほしいという話を聞くことができた。

保存会は上手な順番でやることをあたり前と思っている。吉祥院天満宮での奉納は仕方がないと思うけど、吉祥院ふれあいジャンボリー（吉祥院地区で開催される催し）やリベレーションフェスタでも上手な順番なので、そこは配慮してほしい¹⁰⁾。

子どもたちも「楽しい」という理由などで練習に参加しているのであるが、自己実現という観点から見れば、練習の成果が身に付くことによってこれまでできなかった演奏をできるようになることや、他の子どもたちよりも上手に演

奏したいと思うようになるのも自然なことなのである。そのような意識は小学生の中にもあり、たとえば保存会の小学生の中でも最も高い技術を持ち、吉祥院の奉納などでも常に最後に叩く小学生の父親からは、以下のような話を聞くことができた。

おじいちゃんが六斎をやってる影響で、「子ども六斎会」に入る前から家でも練習やってて。食べ物を入れるタッパがあるでしょう、あれを4つ並べて、幼稚園の頃から叩く真似をしてました。今でも「他の子どもには負けたくない」と言いますね¹¹⁾。

古くから保存会に関わってきた人々からすれば実力主義はあたり前であり、また、演じる子どもたちの中にも「他の子どもよりも上手な演奏がしたい」という競争心を持つ子どもが現れている。しかし小学校職員からすれば、できるかぎり平等主義でありたいという思いがある。しかも実際に実力主義と平等主義との間で発生している矛盾にも直面しているという話も小学校職員から聞くことができた。

子ども同士の中にも「ねたみ」みたいなものがある。花形は最後のほう、実力から言うと上手な子が最後であることを、子どもたちに理解させるのが難しい。一本ぶちの最後は君、二本ぶちの最後は別の君、としたら教育的配慮はできるけど¹²⁾。

保存会活動が自己実現の場であるという側面を持つ以上、このような実力主義と平等主義の間で問題が生じてしまうことは不可避であろう。

（3）後継者育成における問題の解決に向けて

現在の保存会ではこの矛盾を回避する方法があるのか、また、解決のための萌芽が見られるのかということが重要となる。矛盾を解決する方法として考えられることは、ひとつの演目や楽器のみを子どもに演じさせるのではなく、様々な演目や楽器に子どもたちを分散させることによって、競争が激化しないようにすることが挙げられる。

現在の「子ども六斎会」の運営方針にもその萌芽が見られ、2002年7月には笛や鉦を教える試みがなされており、ごく簡単な形ではあるが、子どもたちも鉦や笛の練習を始めている。ただ、子どもたちに「太鼓以外にどの楽器や役をやりたいか」という質問をすると、どの子どももかなり具体的にやりたい楽器とやりたくない楽器を答えてくれた。そのような事実からすれば役割分担も順風満帆であるとは言いきれないものの、子どもたちも他の楽器にも興味を持っているという点において、解決の萌芽が見られると言える。

その他にも、実力差を広げてしまわないようにすることも重要である。私自身が毎回の練習を見学している中でわかったことは、高齢の保存会員も練習の際は上手な子どもに集中的に技術を伝授するという方針は取らず、やる気のある子どもや、教えを請う子どもがいればいつでも対応するようにしているということである。これらのような活動がさらに進展すれば、実力主義と平等主義の矛盾はかなり解消するのではないと思われる。

おわりに

本論考は、都市における文化の研究として、

六斎念仏という民俗芸能の保存会活動を事例に、その保存会活動に地域住民が参加する要因の変化について都市化との関連をもとに把握することを試みた。そして保存会活動の中で生じている諸問題について、それらが個別に発生しているのではなく関連性を持ったものであるということを明らかにし、その解決の萌芽についても若干の指摘を行なった。

本研究では、六斎念仏への参加要因が、強制参加から参加者個々人の精神的充足へ推移していくという趨勢を示した。たしかにこれらが各時期における主要因であることは調査結果からも明らかであるが、実際には、地域アイデンティティにもとづく意識や、吉祥院地区が農村地帯であった頃の生活様式の名残として、六斎念仏の保存が続けられてきたという側面もあることは想像に難くない。これら諸要因の関連を把握するためには、今後、保存会と他の地域組織間との関連を明らかにできるような調査をさらに進めることが必要であると考えている。

本研究において調査対象となった地域は、高度経済成長のもとで農村から都市へと変化を遂げている。シカゴ学派を中心とした都市社会学の場合には、「集落の人口量・密度・異質な構成」という三要因を独立変数とする生活様式の特徴」（鈴木，2002：7）からアーバンズムを分析するという視点が存在するが、日本の都市を研究する場合、大多数の都市は農村から都市へという変化を経て現在に至っているのであるから「都市と農村」という視点から研究を行なうことも重要であろう。しかも本研究の事例においては、保存会参加者たちは自発的に参加し、そして自らの精神的充足を求めているという点においてアソシエーション的な側面をもつ一方、その活動はコミュニティを基盤として維持され

つづけているという側面も窺い知ることができる。この事実は「旧来のコミュニティの解体」という視点ではなく、アソシエーション的な諸要素によるコミュニティの「再創造」という視点を導出できる可能性を有すると思われる。

事例として取り上げた六斎念仏の保存活動を、ただ単純に地域文化が継承されて行くという点においてのみ把握するのではなく、地域文化のようなその地域にとって象徴となるものを中心として地域住民どうしが世代を超えて交流を深め、地域住民間に新たな協同が生まれていくという過程に注目すべきではないか。そしてその「再創造」の主体となる地域住民の活動を、ただ現在の時点においてのみ捉えるのではなく、子どもたちの世代に注目することによって将来的な活動のあり方にまで展望を広げることができるものと思われる。

しかし、これをただ単に将来的にむけた地域住民の活動の活性化などといったような文脈に結びつけるのは安易であり、楽観的な考えとならざるをえない。たとえば地域開発や区画整備、企業の誘致や撤退などといった、目に見えて明らかなレベルで住民の生活条件が変化することによって活動のあり方が変化するということも容易に想像できるであろう。また、本研究において着目した意識における問題も重要となる。本研究で設定した「実力主義」と「平等主義」という意識格差は、各世代において明確に意識されていたものではないが、これは明らかに存在するものである。地域住民の活動や地域文化、そして地域の再創造という将来の展望を考える上で、意識に注目することによって活動の問題点と可能性を考察することも重要となるであろう。

ただ、このような視点のもとで研究を進めて

行くためには、意識と活動のあり方を捉えるための理論的基盤が必要となる。事例として取り上げた吉祥院地区の場合は農村地帯から都市へと変化を遂げたのであるが、たとえば農村から都市へと地域が変容を遂げていく中で人々の生活様式や意識において農村の頃から受け継がれた生活様式や意識がどれだけ残っているのか、また、それらの残されたものと新たに出現した都市的生活様式との関連がいかなるものであるかといったように、意識と活動のあり方を総合的に把握するための理論的基盤が本研究においては不十分であり、これは今後の研究上の課題として残されている。

日本の都市とその文化を研究するためには、都市社会学の成果を踏まえつつ日本における都市および都市化を捉えられる理論と研究視角を構築する必要がある。そしてそのためには今後も実証研究をさらに深め、その成果を理論構築につなげていくことによって、本研究において果たされなかった課題も克服できると私は考えている。

謝 辞

本研究の執筆に際しては、吉祥院六斎念仏保存会および六斎念仏保存会連合会より多大な御協力をいただいた。研究にご協力いただいたすべての関係者の方々には、深く感謝の意を表したい。なお、本研究におけるすべての記述については筆者が責任を負うものであり、関係者の方々は一切責任を負うものではない。

注

- 1) 本研究においては「都市化」を人口量などの指標から捉えるのではなく、農村から都市への変化として捉えるという地域社会学的方法を用いている。このアプローチの是非と可能性につ

いては鈴木（2002）を参照。

- 2) ただし、この指定は1954年に取り消しとなっている（田中，1959）。
- 3) 2001年には12の保存団体が上演を行なっているが、中には保存会が存在するものの、実際に上演を行っていない場合もある。
- 4) 地域団体以外では六波羅蜜寺が六斎念仏保存団体連合会に属している。
- 5) 「チャワン」とは子ども、幼稚などの意を表す語である。
- 6) 太鼓を打つのが早く、リズム感があることを指して、菅原組ではこれを「手が軽い」という言葉で表した。それとは逆に、打つのが遅く、リズム感が良くない場合は「手が重い」と言う。しかし京都市内の保存会の中には打つ早さを重視しない地区もあり、昭和30年のマンボブームの時期には、打つ早さを重視した吉祥院六斎を揶揄して「マンボ六斎」と呼ぶこともあった。共親会がコンクールで優勝した理由について、六斎念仏をあまり知らない審査員が審査したため、打つのが早いので素人目にもわかりやすい共親会が評価されたという話も調査の中で聞くことができたが、その真相は現在となっては不明である。
- 7) 2001年11月4日、保存会会計に対するフォーマル・インタビュー。
- 8) 中堂寺六斎念仏は、京都市下京区にある中堂寺坊城周辺の地区に在住する住民によって保存会活動が行なわれている。
- 9) 2001年10月21日、京都六斎念仏保存団体連合会会長へのフォーマル・インタビュー。
- 10) 2001年10月13日、吉祥院小学校職員に対するフォーマル・インタビュー。
- 11) 2001年10月26日、「子ども六斎会」会員の父親へのインフォーマル・インタビュー。
- 12) 2001年10月13日、吉祥院小学校職員に対するフォーマル・インタビュー。

文 献

- 足立重和，2000，「伝統文化の説明—郡上おどりの保存をめぐる」『歴史的環境の社会学』新曜社。
- 秋里湘夕他編，1928，『日本図会全集二期—都名所図会』日本随筆大成刊行会。
- 佛教大学民間念仏研究会編，1966，『民間念仏信仰の研究』隆文館。
- 藝能史研究会編，1982，『京都の六斎念仏』京都市文化観光資源保護財団。
- 五来重，1998，『踊り念仏』平凡社。
- 橋本裕之，1989，「これは『民俗芸能』ではない」小松和彦編，1989，『これは「民俗学」ではない—新時代民俗学の可能性』福武書店，71-109。
- ，1993，「民俗芸能研究という神話」民俗芸能研究会・第一民俗芸能学会編『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房，3-15。
- 平凡社編，1979，『京都市の地名』平凡社。
- 片桐新自，2000，「歴史的環境へのアプローチ」片桐新自編『歴史的環境の社会学』新曜社。
- 木原啓吉，1982，『歴史的環境』岩波書店。
- 宮本常一，1966，「民俗学と民俗芸能と」『藝能史研究』12: 20-32。
- 森田竜雄，2000，「鉢叩」横田冬彦編『シリーズ近世の身分的周縁—芸能・文化の世界』吉川弘文堂。
- 守屋毅，1992，『近世芸能文化史の研究』弘文堂。
- 大橋敏雄，1974，『踊り念仏』大蔵出版。
- 大石泰夫，1998，「民俗芸能と民俗芸能研究」『日本民俗学』213: 82-97。
- 大森恵子，1992，『念仏芸能と御霊信仰』名著出版。
- 折口信夫，1991，『日本芸能史六講』講談社。
- 野田浩資，1996，「＜歴史的環境＞というフィールド—平泉町柳之御所遺跡の保存問題をめぐって」『環境社会学研究』2: 21-37。
- Park, Robert., et al., 1967, "The city" University of Chicago Press, 1972, 大道安次郎，倉田和四生訳『都市—人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会。
- 山下晋司編，1996，『観光人類学』新曜社。

米山俊直，1967，『日本のむらの100年』日本放送出版協会。

吉見俊哉，1987，『都市のドラマトゥルギー—東京・盛り場の社会史』弘文堂。

鈴木広，2002，「現代都市社会学の課題」鈴木広監修『地域社会学の現在』ミネルヴァ書房。

田中緑紅，1959，『六斎念仏と六斎踊』京を語る会。

鶴見俊輔，1999，『限界芸術論』筑摩書房。

Preservation Activities of a Folk Performing Art and the Problems in Successor Training –Case study about the preservation activities of “Rokusai-nenbutsu” in Kyoto, Japan

AIHARA Susumu *

Abstract: The purpose of this article is to reveal relations between a city and its culture through a case study about preservation activities connected with the folk performing art Rokusai-nenbutsu (a traditional Buddhist drum - music and dance) that is preserved in Kyoto, Japan. In this research, I want to focus on the problems in successor training that constitute the most important subject in this activity, and analyze these problems by revealing the relations between the residents' life and the city as the place where they live. To analyze these problems, three viewpoints are brought up: first, urbanization as a transition of this area from rural to city due to industrialization, second, the consciousness of the participants, third, the gap in consciousness between each generation of the participants.

The following facts are revealed through this research: people who have been active in this preservation activity for many years were made to participate compulsorily, and they regard the merit system in evaluation of the art. But members of the successive generation can participate in this activity freely, and they are asking for mental sufficiency. And people who help with the training for the successive generation demand equalitarianism in the treatment of the successive generations in evaluation of the art.

From these viewpoints, it is revealed that the problems in the preserving activity occurred due to relevance, not individually.

Keywords: folk performing arts, urbanization, compulsive participation, mental sufficiency, merit system, equalitarianism

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University